

東アジアにおける「和解」の模索

張 宏 波 (PRIME 所員)
秋 月 望 (PRIME 所員)
石 田 隆 至 (PRIME 研究員)

プロジェクトの概要

冷戦崩壊以降、ドイツとその周辺国や南アフリカ、中南米諸国などにおいて、「過去」や「負の遺産」を直視して克服しようとする努力が続けられている。こうした「和解」へのグローバルな潮流から、東アジアだけが取り残されている嫌いがある。それは中国や朝鮮半島に対する近年の日本の向き合い方にとりわけ顕著である。歴史的文脈を踏まえることもなく、相手の状況に対する想像力を欠く傾向が強まっており、東アジアでは「和解」や平和の実現がむしろ困難になっているかのようである。

その最大の要因が、先の戦争に関する戦後処理の不調にあることは言うまでもない。しかし、対北朝鮮をのぞけば国家間の戦後処理は「一応済んだ」ことになっており、さらに「河野談話」「村山談話」や「不戦決議」に代表されるような形での「一定の」謝罪表明もなされている。したがって、問題は政治家の「失言」などに代表される政府のレベルにとどまらず、市民一人一人からなる社会的な次元で戦後処理が終わっているかどうかにある。それは、近年の市民レベルでの対中国・北朝鮮感情のかつてない悪化をみれば明らかである。韓国に対してはここ数年、民衆文化の面で親近感が高まっている側面があるものの、竹島／独

島問題への対応をみると、本質的な変化といえるかどうか心許ない。

むしろ、東アジアから厳しく非難されながらも靖国参拝を強行し続けた小泉純一郎元首相に国内では高い支持が集まり、北朝鮮の拉致問題や中国国内の民族問題などへの注目と非難の声が高まって、それが日本のかつての強制連行＝拉致や民族蔑視・同化政策の歴史と関連づけて捉えられることがほとんどないといった傾向に、問題が集約されている。見たくない「過去」は忘却され、「被害」の記憶ばかりが操作的に残されていくことで、「歴史修正主義」に足をすくわれていること自体に気付かなくなっている側面がある。こうした状況を自覚的に問い直すことなしに、「和解」や「東アジア共同体」など実現しえないのではないか。日本とかつての被害国との間の「視点」があまりにもかけ離れたままであるがゆえに、「現在」においても平和に向けた努力を進めるための「協力」「共通認識」が生まれないのではないか。

そこで、被害国側の視点も取り入れて、「東アジアの視点」から戦争を捉え直すことで、自分なりの戦後処理を進めてきた元兵士たちの証言に「和解」にむけた手がかりがあると考え、聴き取り調査を行うことを課題とした。同時に、その成果を学生に還元し、学生を含めてメンバーがそこから何を感じたのかを自覚的に振り返ることで、われわれがどのような「視点」に捉えられている

かを浮かび上がらせていくことにした（メンバーは、秋月望所員、張宏波所員、石田隆至研究員）。

研究活動の概要

①札幌での戦争体験者からの聴き取り調査（2010年4月）

札幌在住のO氏への聴き取りを実施した。同氏は、中国で戦犯として抑留されていた時期に経験した独特な戦犯教育を通じて戦争経験を自覚的に反省し、帰国後も戦争の被害のみならず加害の実態をも証言しようとした元戦犯の組織で副会長を務めた。中国で獲得した戦争犯罪認識を戦後社会の中で伝えることは、抑圧され忘却された「記憶」を刺激する側面があり、その困難さが浮き彫りとなった。また、O氏と交流のある北海道大学の研究者との研究交流・意見交換を行い、戦後世代がO氏らの思いを受け止めていく上での課題について議論した。

②公開勉強会〈東アジアの「過去」と「現在」を見つめ直し平和を語るカフェ〉（計4回）

研究調査活動を学生に還元し、日本の対東アジア歴史認識の問題点を議論する場を今年度も4回もつことができた（東アジアへの「まなざし」を捉え返すこうした試みは08年度に引き続いて行った）。

第1回（2010. 5）アジアへの「まなざし」を捉え直す（1）

中国での日本人犯罪者への死刑・毒ギョーザ問題の「その後」

第2回（2010. 6）アジアへの「まなざし」を捉え直す（2）

元兵士の戦場体験を聞く

第3回（2010.11）衛生兵としての戦場体験と戦後の歩み

松本栄好さん（88歳、キリスト教会引退牧師）の証言

第4回（2011.1）「東アジアにおける和解」のための課題整理と展望

事前学習を踏まえたうえで、できるだけ実際の戦争体験者の証言に触れてもらい、そこで生じる疑問、発見、反発、不快感などの意味を見つめてみた。参加者は自身の歴史的知識の不足や、中立的だと思い込んでいた歴史・社会認識が日本の特殊性に深く根差していることに気付いたと語るケースが少なからずあり、この取り組みの重要性を再確認できた。一般論としては「平和」や「和解」を望ましいものと思っているにもかかわらず、中国や北朝鮮といった具体的な「他者」が相手になると、「不信」や「憎悪」が前面に出てしまうのはなぜなのか、そのとき何を根拠にそうになっているのか、一つ一つ丁寧に確認していった。

もちろん、単純に「日本はよくない」という逆方向に振れてしまうだけでは問題である。それでは、「日本」「中国」「アメリカ」といったナショナルな認識枠組みを強化することに繋がってしまいかねない。むしろ、対他者認識に一般的に見られる「偏り」から誰も自由ではいられないこと、あるいはナショナルリティそのものに私たちがいかに深く囚われているかを知るという普遍的な方向に、参加者の思考を誘う必要がある。それを最終目標とするために、それまでほとんど疑うことさえなかった自身の「まなざし」を相対化していく作業を今後も続けていきたい。

ただ、戦争体験者の証言を聴くことを望んでいる学生が多いのに反して、証言者の高齢化でその実現が難しくなっている現実がある。2011年度は、2010年度の平和学講座でも講義を担当された森井眞元学長、中山弘正元学院長もお招きして証言して頂くことを検討している。複数のリピーターも

いて議論も深まりつつあることから、地道に継続していきたい。

③戦争責任問題に関する国際シンポジウム（2010年11月14日）

PRIMEと本学キリスト教研究所との共催で、国際シンポジウム「東アジアの戦後『和解』のために：いま何が求められているのか？」を開催した。本プロジェクトとしてもこれをその一環と位置づけ、野田正彰氏（関西学院大学、精神医学）と中山弘正氏（本学元学院長、ロシア経済）をメイン・スピーカーとしてお招きした。森井元学長、中山元学院長を中心とした明治学院の戦争責任・戦後責任に関する真摯な取り組みは、戦後日本社会の現状を考えれば、きわめて意義深いものである点を再確認する一方で、それを明学全体、さらに日本社会で共有していくための取り組みが十分深化させられなかったという問題点も指摘された。「学長声明」や「戦争責任・戦後責任告白」が戦争責任を果たしていくための「スタート」でなく「ゴール」になってしまっているのではない

かという問題提起もなされた。森井・中山両先生が着手された問いかけを引き継いでいくことはPRIMEの責務の一つであると考え、本プロジェクトでもその一端を担っていきたい。

④島根・広島での戦争体験者からの聴き取り調査（2011年3月22日～28日）

島根県および広島県在住の戦争体験者から聴き取り調査および資料収集を行った。今回は戦争体験の聴き取りだけでなく、戦争責任認識を若い世代に伝えるための取り組みに関してもヒアリングした。戦争体験者が自身の経験を、「現在」の状況と結びつけて伝えていく努力が十分ではなかったケースでは、若い世代への継承がかなり困難になっていることが明らかになった。「過去について学び、考える」ことが「現在の自分」「現在の社会」のための営為であるということをどのように示していくかは、本プロジェクトの抱える課題でもある。若い世代への聴き取りも今後実施していく必要がある。